

平成 28 年 3 月 3 日

平成 27 年度 国立大学図書館協会海外派遣事業 参加報告書

北海道大学附属図書館

城 恭子

このたび、平成 27 年度国立大学図書館協会海外派遣事業により、アメリカのマサチューセッツ大学アマースト校（以下 UMass Amherst）等を訪問し調査研究を行ったので、以下のとおり報告する。

1. 訪問期間

平成 27 年 11 月 2 日（月）～11 月 19 日（木）

2. 訪問先 / 担当者

(1) UMass Amherst / Ms. Maxine Schmidt, Ms. Sharon Domier

(2) Hampshire College / Ms. Jennifer Gunter King

(3) Amherst College / Ms. Kelly Dagan

3. 調査研究テーマ

UMass Amherst における継続的な実務研修プログラムの構築および各種調査

4. 調査研究の目的

UMass Amherst において、学習支援業務担当者向けの研修や求められるスキルに関する調査、および関連する図書館サービスの見学・調査を内容とした実務研修を行い、学習支援担当者向け研修プログラム構築のための知見を得る。また、本研修を継続的な実務担当者向けプログラムの端緒とすることにより、国内大学の課題解決に資するための海外との持続的連携の確立を目指す。また、日本の高等教育の状況の変化とそれに伴う学習方法の多様化・学習支援の進化に対応していくためには、学生、教員、学内の学習支援系組織等のステークホルダーとの協働・連携が必須であることから、その先行事例についても調査する。

5. 成果

UMass Amherst を中心に、主に学習支援に携わるライブラリアンおよび他部署の担当者等 52 名を対象として、インタビュー形式による聞き取り調査を行った。

アメリカでは“Job Description”と呼ばれる文書によって個々の職責や求められるスキル・資質が明文化されており、ライブラリアンも例外ではない。そのため、体系的な研修プログラムというものは存在せず、たとえば情報リテラシー教育に携わるライブラリアンのティーチング・スキル向上のための取り組みとしては、米国大学・研究図書館協会（ACRL）等が提供するオンライン講習などによる自己研鑽のスタイルが一般的であることが分かった。ただし、UMass Amherst では学習支援の進化・高度化に対応するため、学内 FD 部門との協働により、ライブラリアン向けのティーチングに関する FD ワークショ

ップの企画・実施が進められているということであった。

ステークホルダーとの協働による学習支援の展開事例としては、たとえば UMass Amherst においては、院生向けサポート部門の主導のもと、図書館やライティング・センター等が協働して学生のリサーチスキル向上を支援するワークショップを連続的に開催しているという事例があった。また、Hampshire College においては、ライティング支援とは別に、学生のオーラルコミュニケーションスキル向上を支援するプログラムが開発されており、学生をピアメンターとして取り入れているほか、教員との協働により特定の授業に組み込まれているという点が特徴的であった。

また、ステークホルダーとの協働を促進させる仕組みとして印象深かったのは、ユーザーエクスペリエンス(UX)ライブラリアンという新しい職種の登場である。たとえば Amherst College では、彼らの主導により UX の方法論や手法を用いて図書館サービスの要素をユーザーの視点からデザインし、利用者にとってより最適な図書館を実現する試みが行われていることが分かった。こうした取り組みにはユーザーとしての学生、教員、学内他部署の職員等との協働が不可欠である、という点が強調されていた。

6. 所感

今回の調査に当たって、ライブラリアンに限らず、学習支援に関わるスタッフが折に触れて強調していたのは、コラボレーションの重要性である。特に UMass Amherst においては、学習支援および教育・研究支援を行う組織が図書館内にサービス拠点を置き、図書館という「場所」を媒体として、それぞれの組織が相互補完的に関わりあいながら、より最適なサービスの実現を迫っていた。またその中であって、たとえば UX ライブラリアンのように新しい理論や手法を積極的に取り入れ、課題解決に活かしていこうとする、正に進化し続けるライブラリアンの姿が特に印象的であった。

UMass Amherst での滞在は実質 1 週間強という短いものであったが、期間中は学習支援とレファレンスを主に担当するライブラリアンのセクションに仮デスクを用意していただき、インタビューやインストラクション・セッションの見学、それ以外の日常的な交流を通して、アメリカのライブラリアンや図書館事情に関する様々な見聞を広めることができた。今後も継続的に情報交換を行うことができる人的ネットワークを形成できたことは、大きな収穫である。また、UMass Amherst 側も今回のような実務研修形式で海外の図書館職員を受け入れたのは初めてのケースであるということ、たとえば留学生向けサービス等、日本のほうが先行していると思われる事例もあり、国を超えた課題やグッド・プラクティスの共有というメリットもあることから、実務担当者の人事交流については好意的な意見を多く寄せていただいた。本研修を端緒として今後も継続的な交流を行い、双方の課題解決に資するような関係性を構築していくべきと考える。